

新しい英習字

榎 本 英 彦

現今わが国の学校で採用され、したがって一般社会にも通用している英習字の書き方は、どのような型のもので、又どのような歴史を持つものであるか。この英習字が英語教育とむすびついてこの方、これが標準的なもの又は絶対的なものと一般に考えられ、誰もそれを疑わないようである。

かつて、「英語青年」の第102巻第5号（昭和31年5月号）に寿岳文章氏が「改めてほしいわが国の英習字教育」という一文を寄せられ、その中で従来のわが国の英習字教育の不合理を指摘し、新しい英習字の導入を提唱された。この「新しい英習字」とはいかなるものであろうか。寿岳文章氏以前にも、これに関する紹介を時たま見た事がある。しかし、それはあくまでも紹介であって、はっきりした形で、わが国の英語教育にその採用を提唱されたのは、この「英語青年」第102巻第5号の一文が最初であろうと思われる。その後、研究社の「英語科ハンドブック」の「語学的指導の基礎（中）」の中で、「英習字」の項目をもうけ、その中で寿岳氏はこの問題を一そう具体的にとりあげられた。

この問題に関しては、私も以前から関心を持って居り、又現代の文化の進歩から見て、従来の非能率な、19世紀的な英習字は早急に新しいものにとってかわられるべきだと考えるので、今ここにこの点について考えて見たい。

× × × ×

ローマ帝国以降のアルファベットの発達の歴史を、その使用法の点から区分すれば、大きく三つの段階に分ける事が出来よう。

- 1 ルネサンス時代における印刷術の発明まで。（1400年代）
- 2 印刷術の発明からタイプライターの発明まで、（1878年）
- 3 タイプライターの発明以後。

古代においては、文字は石や木にノミできざまれた。英語の write という言葉は古代英語の writan（ひっ搔く）からゆらいし又、ドイツ語の schreiben や英語の scribe もラテン語の scribere（かきむしる）から派生しているのは興味のある事実である。ローマ時代の大文字は、その威厳と調和の美しさにおいて、これらの文字の最も完成されたものと言ってよいであろう。

文字が羊皮紙にペンでしるされるようになり、ペンのもつ柔軟さが新しい傾向を文字にもたらすようになった。かくして4、5世紀頃には Square Capitals とならんで Rustic Capitals や Uncials が用いられるようになったが、特に Uncials に至ってはペンと羊皮紙の影響がはっきりあらわれ、文字の上下の突出もちらほら見られるようになり、小文字の芽生えをここに見る事が出来る。これらの三つは Capitals（大文字）と見なされ、Majuscules と呼ばれる。

わが国で漢字から「ひらがな」が派生した事実にも比せられるのは、これらの Majuscules

からの Minuscles (小文字)の発達である。大文字は formal hand として用いられたが、手紙や、その他の文書には、いわば、草書体ともいうべき書体が除々に発達し、つづけ書きの傾向から文字は丸味を帯び、又筆の勢は b, g, q のように文字の上と下に突出を生み出す事となった。これらは、いはば informal hand であり、総称して Roman cursive と呼ばれるが、Half-uncials はその中の代表的なものである。これはその変形として England において Insular Half-uncials 大陸諸国において、Visigothic, Beneventan, Merovingian といった諸々の地方的なタイプを生み出して行ったが、大文字に比べこれらの cursive の方が時代の要求——書き写しやすい事、又同一の紙面により多くの文字を書きこむ事の出来る経済性等——にかなないその使用はますます一般化し9世紀頃には Caroline Minuscule として一つの完成を見たのである。

日本の平安時代と時を同じうするこの時代は Carolingian Renaissance とゆう名前で呼ばれるように、ヨーロッパにおいても文化の栄えた時代であった。この時代に完成された Caroline Minuscule はその明確さと優美さの点で文字の歴史の上に輝やかしい位置を占めているばかりではなく、これこそ実に、現代のアルファベットの小文字の直系の祖とも言うべきものである。一般に「ローマ字」もしくは「ラテン文字」と呼ばれる現代の西欧のアルファベットは、すべてそのままローマ時代から伝承されたものではない。特に小文字はローマ時代には存在せず、以上のべたような変化によって現われてきた Caroline Minuscule が15世紀頃のルネサンス時代にローマ時代の大文字と調和するようにデザインされたものである。

しかし Caroline Minuscule からルネサンスに至る中間に、文字の歴史から考えて、一つの奇異な現象を経験する。それは Gothic scripts の出現である。Gothic scripts の複雑で黒々とした字体は何にゆらいずるであろうか。これに答えるのはやさしくないが、時代精神の反映、変化を求める人間性によるものと考えるのが最も当を得ているであろうし、当時の建築様式との調和とゆう点から考えてもこの字体の出現は時代の産物と言う事ができよう。この字体は現在「ドイツ文字」と呼ばれているものに似ている。しかしこれは12世紀から15世紀にわたってヨーロッパ全域に用いられたのであってドイツだけの専有物ではなかった。

15世紀は実にこの Gothic scripts と新しい活字体との交代の時代であった。当時の出版物を年代を追って見てゆくならば、Gothic scripts がしだいに影をひそめてゆき16世紀後半ともなればドイツ及び北欧をのぞいてはその使用は一般的でなくなった事に気づくであろう。ドイツにおいてはなぜ後世までこの Gothic scripts が用いられたかと言えば、これはドイツの国民性にもよると言えるが、1442年に Gutenberg が活版術を発明した事実を思いおこす必要がある。これは1476年の Caxton の活版術、1470年の Nicholas Jenson、1495年の Aldus Manutius の活字より数10年早かった事を考えれば、Gutenberg がなお Gothic scripts が一般的だった時代に、これを活字にしたとゆう事実が決定的な影響をあたえたと見てよい。

15世紀は Renaissance の時代であり、又同時に印刷術の発明の時代であった。Renaissance 精神は当時用いられていた北欧的な Gothic scripts をきらい古代ローマの文字へのあこがれを起させた。かくして当時の人文学者達の発見したものは、先にものべた Caroline Minuscule であって、これが古代ローマの文字だと言うことは不可能であるが、ともかく当時の学者によって「古代文字」"Littera antiqua" と呼ばれるようになった。そして、これが

小文字として、古代ローマの大文字と並んで現代のヨーロッパ諸語のアルファベットとして用いられるようになり、それ以後においては、少くとも活字体の上では根本的な変化はなかったと言う事ができる。

15世紀における印刷術の発明は単に文字の上ばかりでなく、すべての文化の上に、決定的な影響を及ぼした事は言うまでもないが、それが文字の歴史上にもつ大きな意味は、筆写体と印刷体を分離させたことであつた。それ以前においては、書物は筆写されたものであり、**handwriting** と活字の開きはなかつた。したがつて、**handwriting** を問題にする場合は16世紀以降の発展を検討しなければならない。先にのべた様にルネサンス時代に成立した現代のアルファベットの活字体 (**Printing type**) はそれ以降現代に至るま根本的には不変である。もちろんその間には **Bodoni** の明晰ではあるが機械的な字体や **Caslon** の調和のある字体等色々な字体が時代や国々の好みによって用いられはした。しかし、このルネサンス字体は現代又は未来にわたつての活字の基礎であるばかりではなく、実に、**handwriting** の、決してそこから遠ざかつてはならない所の標準なのである。

1522年にイタリアの **Ludovico Arrighi** は最初の **handwriting-manual** とも言うべきものを出版した。これは1501年に、**Aldus Manutius** が **Caroline minuscule** の草書体として活字にした **Italic** 字体に負うものであつてルネサンスの時代精神をあらわすと同時に読みやすさ、書きやすさにおいてすぐれ、当時の一般人から歓迎され、各国にその追従者と、それになつた習字教本を生み出した。**Arrighi** が教皇庁の尚書院係であり、これらが教書に採用されたところから、この筆写体は **Littera Cancellaresca** と呼ばれる。そしてこれこそ実に現代の **Chancery script** 又は **Italic script** (**script** は印刷用活字を **type** とゆうに對し **handwriting** の字体を言う。) と呼ばれるものの前身なのである。

それ以降の筆写体の変化については、くわしくのべる必要はないが、**Round hand** の出現には充分の注意をはらう必要がある。**Chancery script** 以後 **Hercolani** によって銅版活字が作り出されるや、筆写体は「墮落」の一步をたどつたと言えよう。主として変化への要求から **b** や **h** や **k** の突出部に球根のようなものがつけくわえられ、初期の自然なペンの回転は必要以上の丸みと、裝飾へと変化して行つた。このようにして **Round hand** は生まれ、イギリスへは17世紀後半に **John Ayres** によって、フランス風の **Round hand** (円字体) が導入された。もちろん **Round hand** は **Italic script** から変形発展したものであるが、18世紀頃にはすでに **Italic script** とは別個のものだつたやう意識が一般人の間にあつた事は当時の記録からもうかがい知る事ができる。

オランダやイギリスの海外発展による商業や貿易の隆盛は、習字の習得に対する必要を大いに高めた。そして18世紀から19世紀においては各種の習字教本や、学校によって広められた **Round hand** の全盛時代であつたと言う事ができよう。

初期の **Round hand** と後期もしくは、現代のものとを比較するならば、初期の裝飾過多がとりのぞかれ字体そのものがすっきりしている事に気がつくであらう。英國の **Vere Henry Foster** が作つた習字教本、それに続いたアメリカの **Platt Rogers Spencer** の書体がこれであつて、明治以降わが国に移入され、学校教育で用いられた書体は実にこれに属するのである。

× × × ×

工芸家 William Morris (1834~96), や Edward Johnston (1872~1944) はこのような handwriting の墮落にあきたらず、新しい美しい書体の創造に乗り出した。彼等は工芸家としての立場から出発したが、真の意味のデザイナーのもつすぐれた調和の感覚と知的才能から見いだしたものは、カロリంగా朝時代にゆらいし、ルネサンスの光によって洗練された Chancery script (Italic script) であった。彼等の活動と、それに続く、Eric Gill, Mrs Irene Wellington, Miss Margaret Alexander, Graily Hewitt, Miss Marion Richardson 等によって、Chancery script への復起の運動は活潑となり、続いてロンドン市内の小学校において実験が開始され、又 A Society for Italic Handwriting が設立された。先に来朝された詩人 Blunden 氏がこの Italic handwriting の名手であった事は人々の記憶に新たな事であろう。

先に Round hand は handwriting における墮落だとのべたが、それはいかなる理由によってであろうか。Handwriting は legibility と personality の二つの要素を同時に満足させなければならない。legibility とは単にある個人によって書かれた文章が読みやすいとゆう事だけではなく、筆写体が活字体からはなはだしく相違してはならないとゆう事をも意味している。しかるにその発達を歴史的に見ても Round hand の発達はルネサンス書体、従って一般印刷体からの遊離の過程と見る事ができよう。Round hand には無味乾燥な商業活動のにおいがただよい、常に一定の方向の線と丸味に規定されている結果、個性の表現の可能性がない。又速く書かれた場合にその読みやすさを失う可能性がより多い事が実験の結果からも証明されているが、我々が日常使用する場合でも m, n, w, v, u; a, o, u; c, e; h, b; l, e 等あやまりやすい場合が多いのに気付くであろう。

ここで最も注意しなければならないのは欧米におけるタイプライターの使用の現状である。タイプライターの普及は、それで印刷された文面を見なれた見に、丸味をおび、続け書きされた円字体の筆記をきわめて読みづらく感じさせる。又タイプライターによる誤読の可能性のない文面が、円字体のまぎらわしさといかに甚しい対象を示す事か。第一次世界大戦以後に Italic hand の使用が広まった。それはタイプライターのさ程普及していなかった当時において、戦時のおびたしい数の手書きされた円字体の文書が数々の誤読をひき起し、多大の不便と不利をこうむった結果、速く書かれても誤読を生じさせにくい Italic hand の優秀さがみとめられたからに他ならない。現在欧米において、あらゆる公文書、又は商業文はタイプライターによって作製される事はゆうまでもないが、その間にあって、やむなく手書きする場合には必ず印刷体を以てしなければならず、公務員の資格の一つとしてこの印刷体できれいに書ける事が要求されている。又一般市民も公文書等には印刷体を要求され “Use block letters!” とか “Print!” とかゆう注意書きはそれを表わすものである。

しかるに我が国においてはどうかであろうか。学校の試験の答案にローマ字で名前を書く場合、又はその他の場合にローマ字又は英語で住所、名前を書く場合にさえ署名に用いると用じ形式で書く人が多い。

わが国において Italic script への関心がうすいのは、第一に明治時代に入った Round hand が絶対なものだとの先入主が支配しているためであろうが、タイプライターがわが国民生活と縁がうすい関係上、文字の現代的機能性が十分に理解されていない点も見のがすわけには行かない。

Italic script の成長は、その美的、伝統的価値に負う所が大であるが、筆写と印刷を同列

にした現代のタイプライターの存在が、文字の legibility を強く要求している事実を見のがす事はできない。

要約するに、Italic hand は美しく、機能的であり、個性的表現の可能性が大であると共に、legibility を失いにくく、速く書け又教えやすく、学びやすいといった数々の長所を持った書体と言う事ができよう。

Italic script はいかなるものであるか。外国で出版される数々の習字教本や小学校の習字教科書にこれを見る事ができるが、我が国でも先にのべた「語学的指導の基礎(中)」にその実例を見る事ができるので、ここでは簡単にその書き方の要旨をのべよう。

ペン——従来のペン又はGペンは不向きである。先端をななめに、又はまっすぐに切ったペンを使う。その切り具合は使用する個人、又は出そうとする字のニュアンスによって異なる。わが国でもこの種のペンは現に売り出されているが一般の目にはふれにくいのではないだろうか。又製図用ペン先、楽譜用ペンにもこれと近いものがある。

Round hand が続け書きを主体としたのに対し Italic script は各文字は別々に書くのを原則とする。もちろん筆勢によって続くのはかまわない。したがって b, k, h, f, l など上の方が Round hand では左文字の続きで円弧を作っていたが Italic script ではそのような事はない。これは g, f, j, q, y の下の突出も右の文字に続けるため円弧をえがく事のない事を意味する。大文字も印刷体とほぼ等しい形に書き A, D, M, N, E, G, S などのように大文字のための特別な形を必要としない。

要するに Italic script は発音記号やギリシャ文字を書く時のように一字一字印刷体の Italic を一字一字紙面に書きうつす、と大ざっぱにこう考えてよいだろう。

Italic script は実用であると同時に芸術でもある。それは日々の用から、さらに、奇矯に逸する事なく、高い個性的芸術のあじわいをも表現する事ができるのである。